



峯  
岸  
義  
秋  
著

平安時代和歌文学の研究

桜  
楓  
社

著者略歴

みね ぎし よし あき  
峯 岸 義 秋

- 1907年 群馬県高崎市に生まれる。  
1929年 高等学校教員検定試験に合格。  
1938年 旧制第二高等学校教諭  
1949年 東北大学助教授  
1952年 東北大学教授、目下在職  
1955年 <歌合の研究>により学位授与  
主な著書——歌論史概説（春陽堂）六百番  
歌合・六百番陳状（岩波書店）歌合集（朝  
日新聞社）歌合の研究（三省堂）

国語国文学研究叢書 5

平安時代和歌文学の研究

昭和四十年二月十日 初版印刷  
昭和四十年二月十五日 初版発行

定価 二〇〇円

著 者 峯 岸 義 秋

発行者 南 雲 正 朗

印刷所 共 信 社 印 刷

東京都千代田区西神田二の二九

桜 楓 社

電話（二六一）八二三六

振替 東京 四六八六三

（南雲堂宛付）

## 序

峯岸義秋氏がこのたび教職四十年を記念して、専攻していられる平安文学に関する論文集をまとめて出されるについて私に一文を書くようにとの事である。

思えば君との交遊も長い歳月となった。君が二十三四歳で高等教員検定試験を受け見事に合格された、その時に、私は試験委員の一人であったことから君を知ることになった。それから時々君に接するにつれて学問に対して極めて篤実であることも知るに至った。私がその頃信州木崎湖畔の夏期大学で日本文学評論の発達と題して講じた時も来られたように思っている。君はその頃、熊本の中学校に勤務しており、種々の雑誌に日本文学に関する論文を発表されていたが、それらをまとめて「国文学の批評的研究」という一書を刊行したいとの事であったので山海堂という書店にすすめて世に出ることになった。

その後やがて東京の学校に來られ、ついで仙台の二高に赴任されることになったのであるが、君の研究は歌論史に範圍を限定してなされ、その頃「歌論史概説」という書をまとめられた。更にその書でも扱われている歌合に中心を置いて研究を進められた。この歌合の研究は、君の独自の研究として開拓することが多く、これによって学位を得られるとともに「歌合の研

究」という大著として世に出るに至った。この方面における劃期的な労作であるが、今日歌合の研究が盛んになって来たのも君の研究にまつ所が多いと言っても過言ではない。代表的な歌合を集めて出された歌合集もこの方面の資料の集成として広く読まれている。

その後、歌合の研究をつづけるとともに、平安和歌の研究を種々の方面から行われているが、ここ数年は古今集撰者の一人である凡河内躬恒の家集や歌の研究に専念されていた。それを中心においてその他の方面にも及んでまとめられたのが本書である。

私は君が多年の研究生活の結果、歌合の研究や本書に収められた平安和歌の研究を完成されるに至ったことに心をうたれるのであるが、それを支えるものとして四十年の教育家としての生活があることを尊く思うのである。そういう教育家としての君と研究家としての君とがともに円熟して一体になっていることを思うとき、君と交ること久しき私は、私自身の人生行路の跡を顧みて感慨の深いものがある。

学術書の序としては或はふさわしくないかも知れないが、私の知るこれまでの君の歩みの一端を記して、いよいよ研究の上にも教育の上にも力強く進まれることを期待する次第である。

昭和三十九年十二月

久松潜一

## 自序

大正十四年春、小学校教員をふり出しにした私の教員生活も今年で四十年になる。このへんで記念の論文集でも出したかどうかという身辺の人々のすすめに従って、四月から旧稿を整理してできあがったのがこの論文集である。過去十年間に発表した論文のなかから、平安時代の和歌に関するもの七篇を選び、そのうち五篇を書きなおし、増補修正を加え、一応読むに堪えるよう編纂したものである。題して「平安時代和歌文学の研究」としたけれども、もとより平安時代和歌文学の概論ではない。標題に明らかなどおり、全部の六割ほどは躬恒研究で、あとは歌合歌論の研究である。このように限定された内容ではあるが、そのいくつかの問題が、平安時代和歌文学の全体的流れに関係するので、あえてこういう大まかな題名を選んだ次第である。本書全体の構成は、分けて三編とした。第一編は、凡河内躬恒の総合研究といえば大げさであるが、それに類するもので、躬恒の生涯と作品とをほぼ明らかにしたつもりである。しかし、題目を設定していざ手がけてみると、案外その資料が少なく、躬恒の横顔すらも十分に描き出し得なかった。「はしがき」で強調したことばも、今となっては取消したいくらいである。それに比較すると、第二編は先学が手をつけていない資料を取りあげた点もあって、やや快心の

作だと思っている。しかし、第二編の半分以上も躬恒研究で、その他も躬恒研究から出発したものである。躬恒研究ということから見れば、第一編が総論であるに對して、第二編は各論の一部と見られよう。とにかく「和漢兼作」や「問答歌」などには、少なからぬ時間をついやし、また努力したつもりである。第三編の歌合歌論も、とかく無視されがちな問題を主として概観した。すなわち、歌合史の一側面を流動する卑俗なるものの持つ革新的意義や、王朝的なるものの脱皮を意味する述懐歌の展開など、もう一度新進の学徒に関心を持っていただきたいと思うので、この二論文を収載した。以上、第一編から第三編まで、問題提起に終ってしまつた点もあるが、私見を率直に披瀝した個所も多い。それだけに、大方のご叱正を乞わねばならない個所も多かろうと思っている。

最後に、本書を刊行するに當って、学恩高い久松潜一先生から序文を頂戴したことを心から感謝申しあげます。また、激励援助を賜つた扇畑忠雄氏、片野達郎氏、それから出版について格別のご配慮くださった臼田甚五郎氏、及川篤二氏に厚く御礼申しあげます。なお参考文献としては、萩谷朴氏の著書に最も負うところが多かったことをしるして、併せて謝意を表す次第です。

昭和三十九年十二月十日

# 平安時代和歌文学の研究

## 目次



|    |      |
|----|------|
| 序  | 久松潜一 |
| 自序 | 三    |

## 第一編

|             |   |
|-------------|---|
| 第一章 凡河内躬恒研究 | 二 |
|-------------|---|

|         |   |
|---------|---|
| は し が き | 二 |
|---------|---|

|                    |   |
|--------------------|---|
| 一 躬恒集とその本文研究       | 三 |
| 二 躬恒伝の概略           | 六 |
| 三 躬恒と貫之            | 四 |
| 四 躬恒と歌壇グループ        | 三 |
| 五 歌歴——古今集序成立頃まで    | 元 |
| 六 歌歴——大井川行幸和歌まで    | 五 |
| 七 歌歴——石山御幸まで       | 三 |
| 八 歌歴——延長三年秋まで      | 七 |
| 九 歌合歌人としての躬恒       | 七 |
| ——寛平御時后宮歌合と平貞文歌合—— |   |
| 一〇 歌合歌人としての躬恒      | 四 |

——亭子院歌合と京極御息所歌合——

|    |          |   |
|----|----------|---|
| 一一 | 躬恒の歌風と評価 | 九 |
|----|----------|---|

——古代から中世にかけて——

|    |          |   |
|----|----------|---|
| 一二 | 躬恒の歌風と評価 | 七 |
|----|----------|---|

——近代から現代にかけて——

第二編

|     |             |    |
|-----|-------------|----|
| 第一章 | 躬恒集の和漢兼作と聯歌 | 一五 |
|-----|-------------|----|

|   |              |    |
|---|--------------|----|
| 一 | 和漢兼作と聯歌および連歌 | 一五 |
|---|--------------|----|

|   |               |    |
|---|---------------|----|
| 二 | 晩秋遊覧行とその詩歌の成立 | 二三 |
|---|---------------|----|

|   |              |    |
|---|--------------|----|
| 三 | 和漢兼作および聯歌の作者 | 二三 |
|---|--------------|----|

|   |               |    |
|---|---------------|----|
| 四 | 和漢兼作および聯歌の文学性 | 三三 |
|---|---------------|----|

|     |          |    |
|-----|----------|----|
| 第二章 | 土佐日記と問答歌 | 一五 |
|-----|----------|----|

|   |           |    |
|---|-----------|----|
| 一 | 土佐日記創作の本意 | 一五 |
|---|-----------|----|

|   |            |    |
|---|------------|----|
| 二 | 土佐日記の対照的表現 | 一五 |
|---|------------|----|

|   |           |    |
|---|-----------|----|
| 三 | 土佐日記の色彩対照 | 一六 |
|---|-----------|----|

|   |          |    |
|---|----------|----|
| 四 | 問答歌とその系譜 | 一六 |
|---|----------|----|

|   |             |    |
|---|-------------|----|
| 五 | 躬恒集・忠岑集の問答歌 | 一六 |
|---|-------------|----|

|     |                       |    |
|-----|-----------------------|----|
| 六   | 問答歌と論春秋歌合……………        | 一七 |
| 七   | 歌合および問答歌と土佐日記……………    | 一八 |
| 第三章 | 堤中納言兼輔をめぐる歌人たち……………   | 一四 |
|     | ——主として紀貫之・凡河内躬恒について—— |    |
| 一   | 兼輔論序説……………            | 一四 |
| 二   | 兼輔と宇多法皇および躬恒……………     | 二〇 |
| 三   | 兼輔と貫之（その一）……………       | 二〇 |
| 四   | 兼輔と貫之（その二）……………       | 二六 |
| 五   | 兼輔薨後……………             | 三二 |

### 第三編

|     |                        |    |
|-----|------------------------|----|
| 第一章 | 歌合における評論的世界の形成……………    | 三九 |
|     | ——天禄三年女四宮歌合を中心にして——    |    |
| 第二章 | 歌合における卑俗なるものと新風和歌…………… | 四九 |
| 第三章 | 歌合における述懐の歌……………        | 五〇 |
|     | 索引（和歌・事項）……………         |    |

# 平安時代和歌文学の研究



## 第一編

### 第一章 凡河内躬恒研究

#### は し が き

古今集時代には紀貫之と相並んで、時には貫之以上の歌才を認められていた凡河内躬恒は、藤原公任・源俊賴ら有名歌人に高く評価されながらも、貫之ほどの和歌史的地位を与えられていなかった。貫之はたしかに古今集の世界の統一者であり、代表者であったが、その作品を現代の文学評論の立場から躬恒の作品と比較してみると、正岡子規の否定的評価とは別に、実力以上にその和歌史的地位が高められていたと思われるのである。それは根本的にいえば、平安時代の和歌文学が宮廷貴族に依存した宿命的な社会性を持ち、その宮廷貴族に率先垂範した貫之の立言とその実行との優位を語るものであろうが、それかといって貫之の作品と芸術家的天分とが、躬恒のそれに卓越していたとは思われない。それで今後の和歌史的研究においては、両者の作品の芸術的価値をそれぞれふり分けて、作品価値のうえからまず公正な和歌史的地位を定め、それから文化史的意義と地位とを論究しなければならない。もちろんその場合にも

広い意味での和歌史的地位——文化史的地位について、躬恒をあながち貫之のうえに位置させようとするのではないが、こんにちの和歌史的研究においても、一応貫之・躬恒と観念的には双壁としながら、実際ははじめから貫之を優位においてその作品を評価しているような例が少なくない。これは意識するとしないとにかかわらず、評論家としての貫之、日記作者としての貫之などの業績をプラスしているからである。それで本稿では、できるだけ貫之に劣らない歌人であったことを論証し、今後の和歌史的研究において躬恒を正当に評価してもらおうと思うのが趣旨である。

## 一 躬恒集とその本文研究

和歌史的研究という点からかえりみると、従来の和歌史的地位を裏書するかのように、貫之に関する研究・評論は多いけれども、躬恒に関するものは極めて少ない。いや、それどころか、歌人としての彼の生涯を縮図した「躬恒集」のどれが最初の正統本か、それすらわかっていない。したがって本稿の躬恒研究も本文研究からはいってゆかなければならないのであるが、これは他の私家集研究とおなじように容易に結論は出ない。しかし、当面した問題としてここには躬恒研究の資料としての「躬恒集」について、一応近代の本文研究を紹介し、私の拠るべき

ところを明らかにしておこう。

躬恒の著作物と見られる主要なものは「躬恒集」である。それもこんにち残存するものから推察すると、数人の手によってそれぞれ変った編集あるいは伝写がおこなわれ、数種の系統をなしているようである。この混乱した「躬恒集」に、最初にメスを入れたのは故西下経一氏である。西下氏は昭和九年、「日本文学大辞典」の第三巻において、群書類従本・歌仙歌集本・書陵部本甲乙丙丁四種について、詳細な数字的比較をしておられる。次に、その研究を基礎にして書陵部本二種について比較しておられるのが松田武夫氏である。松田氏は昭和十一年、「王朝和歌集の研究」という著書の「私家集の研究」において、書陵部本五〇一・三〇七と五〇一・二〇六との組織について対照しておられる。その次に、西本願寺本について研究されたのは久曾神昇氏である。久曾神氏の「西本願寺本三十六人集」に関する論考は多いが、そのなかでわれわれが最も便益をこうむっているのは、昭和十九年、飯島春敬氏と共著で出された「国宝西本願寺三十六人集」である。群書類従本や国歌大系本などによって幾多の疑問を抱きつつ読んでいた「躬恒集」のほぼ全貌を、はっきりと見せてくれたのは右の覆刻である。もっともこの西本願寺本の写本は書陵部にあつて、後に紹介するように大いに利用させてもらっているのはあるが、書陵部本が自由に見られなかったあの当時としては、非常なたまものとして便益を得たのである。

久曾神氏はなお昭和三十五年、「三十六人集」(塙書房)を出版し、そこにも「三十六人集」の



「躬恒集」の系統を明らかにされ、その諸本系統を次のように断定せられた。

管見に触れた躬恒集は五類に大別せられる。歌数の最も少ないのは書陵部甲本で二二〇首、次は歌仙本で三二九首、伝西行筆淡紙表紙本も同系統である。次は書陵部蔵乙本で三八四首あり、重出歌が三十首ほどあり、草稿本的性質が見られる。次は同じく書陵部蔵丙本で四一八首あり、重出歌が九首ある。歌数の最も多いのは西本で四八八首あり、連歌一二句漢詩七首を除いても、なお四六九首である。芦庵本及び類従本は同系統であるが、歌三六首、連歌一二句、漢詩七首を脱し、四三三首となっている。

ここにいう「西本」とは、いうまでもなく西本願寺本である。かぞえ方については後に述べるように異議があるが、とにかく躬恒の作品を最も多く集めている最古の本という点だけからいっても、西本願寺本の資料的価値は偉大である。

その西本願寺本を書写した書陵部本を中心として、私どもは一通り躬恒の作品を概観したいので「書陵部蔵躬恒集」という校合本を作ってみた。片野達郎、渋谷孝両君との共著である。ただしその前、私どもは橋本不美男氏から書陵部蔵「躬恒集」についてご教示を得た。それによれば、書陵部蔵「躬恒集」は次の八本で、ほぼ三種類に分けられるようである。

- 1 西本願寺本系      五〇六・八      五一・二      一五一・四二五
- 2 歌仙家集本系      五〇一・三〇六（下巻欠）
- 3 その他